
ぬい

三崎伸太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬい

【Nコード】

N1867J

【作者名】

三崎伸太郎

【あらすじ】

アメリカのロス・アンジェルスにある日系のケイロー・ナーシング・ホームに「ぬい」と言う寝たきりの老婦人がいる。ある秋の朝、彼女の一生が束の間、純白に光る一本のクモの糸により呼び起こされた。

（前書き）

今から二十六年前、私はロス・アンジェルズにある日系紙「羅府新報社」の公募した新年懸賞小説に「ぬい」題した短編小説を応募し、第一席をいただいた。あれから仕事の合間に色々な小説を書き、一作は講談社の「小説現代」にも使っていたのだが、わたしはこの「ぬい」が一番好きで、優れていると思うている。散文詩のように書き、短く、そして人の一生を表わす事が出来た。

ぬい

神田 了

空中に何か光るものがある。 一筋、気の外気に漂うもの。 何だろ。

ぬいは、目ではなくて頭のシンでそれをとらえようとする。 糸・
・いや、違うのかしら。 変なもの。

おぼろな記憶が、わた雪のように現れては、そのものに当たって消えた。

秋の朝。 ケイロウ・ホーム。

ぬいは、しらじらと夜の明けるころ目を覚ました。 そして、限られた中庭の景色を一つ一つ数えるかのように、何度も視点を変えて眺めていた。

歩行が出来なくなつて三年。 片方の手が自由に使えなくなつて一年。 寝たつきりの生活が半年も続いていた。

ぬいの人生は・・・一人息子は第二次世界大戦、ヨーロッパの戦場で戦死。 夫は、その後を追うかのようにアリゾナの強制収容所で病死。 これで十分だろう。

人間の一生は、個々人において、我々の持つ思考能力をはるかに越えたドラマ的なものからなりたっている。 そして、それを批評するにしても、われわれは余りにも人間自体について知らなすぎる。 他人を知ることに対して、自分を見失う人の何と多いことか。

ただ、我々にとって幸なのは、人生と言う劇場で演じられる悲劇も喜劇も、理性と感情をあわせ持つ生物の生存過程において、平等に演じられるという事だ。

ぬいは、ベットに寝ている。 身動きもせず、息づかいさえも聞こえないほど静かに。 そして、虚空を見つめている。

一筋の光が空中に漂っていて、そのゆるやかなうねりが記憶の底

をまさぐっている。

やがて、その反動でぬいの古い記憶がよび起された。

まあ、ずいぶんにぎやかなこと……。

自分の姿が視覚に映っていた。カスリお着物を着た、ぬい。

子供とたわむれている夫。正月なのか鏡餅が床の間に飾っており、その上に置いてあるミカンのオレンジ色が、とても新鮮に見える。

あなた……。

夫と子供がふりかえる。微笑した顔がぬいを見つめ……ゆつくりと消えていった。

一筋の光が空中に漂っている。

ぬいは、それを見つめた。今は、そのものが何であるのかと考えているのではない。

その一筋の光に祈っている。

まもなく、光は波動を作り次第に大きくなって、あたり一面を純白に変えた。そして、その中から、浮き出るように一ツの光景が現れてきた。船上だった。港に停泊している船は、たくさんの人々の見送りを受けている。子供を抱いた夫とぬいは、甲板の手摺から、その人々を眺めていた。日の丸の小旗がたくさん見える。それがメチャメチャにゆれる。

あの時、年老いた父と母が見送る人の間にいたのだ。大正五年、アメリカに向けて夫二十八歳、ぬい二十三歳。

その数年まえ、夫に嫁ぐ前夜、父と母は娘に一振りの懐剣を与えて言った。

ぬい、我家は落ちぶれたといっても代々幕府直参の士族だ。武士の誇りはすててはならん。死ぬことをおそれるな。

ぬいの頭の中で、その言葉が生物のように動く。

そして、青い光を放つ刀が静かに見守っているのがわかる。刀は、今までに三度鞘より抜かれ、三度ぬいを助けた。その内の一度は、自分自身が死を希望したものだだったが……。

一筋の光がゆれている。

アメリカの国旗が見える。 汽車が走る。 広大な大陸。 一面に広がる枯れ草の上を風が走る。
夫がたたずむ。

この土地だ。 山肌の露出している、山とも丘とも形容しがたいそのふもと。 夫の希望に満ちた顔が見える。

シュガーピート。 その新芽があたりを黄緑色にした朝、夫と妻は手を取り合って泣いた。

荒野の開墾は、小額のお金と若さだけが頼りだった。

馬車の手綱を取り、子供をひざに置き、ぬいは働く。

夫の日焼けした顔が見送る。

ヒズメと車輪の音が、遠くに聞こえたり近くに聞こえたりする。

それを楽しみむかのように耳を澄ましていると、何か異質な音が混ざって来て、耳をとらえた。

廊下を歩く音。

ケイロウ・ホームの中庭に秋の陽がまぶしい。

ぬいは、顔を上向きに直した。

白い壁の表面に二、三筋の亀裂が見える。

廊下を歩く人の足音が、少しずつ多くなって来た。 そのうち物を引っぱる音が近ずいて来て、ぬい達の部屋に、エイドさんと呼ばれる看護助手が入って来た。

この二人部屋の相手は、年は七十歳。 食欲もあり、良くしゃべる老人だが少し耳が遠く、歩行が殆んど出来ない。

ボーイさん、と呼ばれるオーダリーの青年が、服を着せて車イスに乗せ、食堂や風呂に連れて行く。

エイドが言う。

「ぬいさん。 今日食欲がないわね。 どうしたの？ ほら、少し食べなさい」

ぬいは弱く首を振る。 ジャムを塗ったパンが口もとに運ばれる。 しかし、口は固く結ばれて開かない。 ジャムがくちびるのはしにつく。

「ほら、おくちをあけて・・・ほら、パン」パンという固形物がくちびるを分けて押入ろうとするが、それは歯茎で止まる。

「しかたないわねえ。じゃ、ミルクは？」

ぬいは首をふる。

エイドは「ここに置いときますから、後で飲みなさいね」と言うと、片方の老人の食事姿をチラリと見て、あたふたと次の部屋に向けて出て行った。

ぬいは、再び顔を横に向けて中庭の一筋の光を求めた。中庭は、

灌木の葉が頼りない秋の色。

一筋の光は、木の葉先近くに見えたのだったが、再びそれをとらえようとするぬいの目は、秋の陽の輝きに耐える力を、すでになくしていた。しかし、ぬいは見つめ続けた。

すると、一筋の光はぬいの頭のシンに現れた。長く、柔らかく、優しくなびく一筋の光。

街の風景。

第二次世界大戦。日系人の強制立退と強制収容所。

夫が家具S A L Eの立札を立てている。S A L Eの文字がいやに大きく見える。今までの努力が、その四ツのアルファベットの中に、総て入っていた。

しかし「S A L E」は、その値打の「五十分の一」程に変えてしまった。ぬい達は、数個のスーツケースに限られた身の回りの品を入れて、家を離れた。その時、終戦後にぬい一人が生きていて他人のものとなってしまっていた家と土地を眺めることになるうとは、誰に想像できただろうか。

砂漠の中につくられた収容所の乾いた空気が、ノドにいがらっぽい。

星条旗の下で、一人息子が軍隊に志願した。

父と母は、賛成も反対もせず、父は、アメリカの為に立派に戦え、

と言った。

母は、死ぬことをおそれてはならない、と言った。

「死」ぬいは、おそれない。戦争で早死にした息子に代わって、生きて来た命だと思っている。今、ぬいは息子に聞かせるようにつぶやく。

この程度で十分・・・ママは、お前の代わりに生きすぎました・・・。

一筋の光がソヨリとゆれた。ふと、ぬいの耳に懐かしい息子の声が聞こえたように感じた。

部屋に、二人のオーダアリイが朝の挨拶をしながら、元気よく入ってきた。

一人は新しくオーダアリイになる青年のようで、他の一人から色々と教わっている。

「このように・・・服を着せて。まア、暇があつたら簡単にでも髪を櫛ですいて下さい。一人で二十人以上も受持つんですから、朝は時間がありませんからね。そして、ほら、こうやって車イスにのせるんです」

オーダアリイは、老人をかかえて車椅子に移した。

「ねッ、簡単でしょう。このようにソックスとクツをはかせてツと。髪をすいて もう、自分では、何も出来ないんですからね。ていねいに、わかりました？」

「こちらの方は？」

「ああ、ぬいさん・・・彼女は、そのまま。もう半年ほど寝たつきりなんです。週二回、フロの時にだけ起します」

ナースが入って来て、ぬいの検診をはじめた。

「そちらのオバアチャン、どこか悪いんですか？」新しいオーダアリイの青年がたずねた。

「別に。でも、オバアチャン、オジイちゃんという言葉は、なるべく使用しないで下さいね」

「はア・・・又、どうしてです？」

「その家族の方達が、肉親でもないのにツて怒るのよ」

「わかりました・・・」青年はとまどったように答えた。 ナースは満足顔で出て行った。

「ボーイさん・・・」

青年は自分と呼ぶ声を耳にして、その方に近寄った。

「気にしなくていいのよ・・・私はオバアチャンと呼ばれるのが好きだから・・・その言葉がなつかしくてね・・・」老人の声はかすれていた。 「ボーイさん・・・その・・・木の上のほう・・・イトのようなものが・・・光ってみえるのだけど・・・何だか、教えてくれませんか・・・」

青年は、ガラス越しに目をこらして外の景色を眺めた。 しばらく見続けた後、彼は木の葉先から流れるように一筋、純白に光るクモの糸を見つけた。

「ああ！ クモの糸です。 あれは、クモのイトですよ、オバアチヤン」

「そう・・・ありがとう・・・」

一筋の光は、クモの糸だった。 ぬいは、その糸に感謝した。

目を閉じると、光は、晴天の空に長く尾を引いて漂っていた。

その端に、青く光る刀がむすばれている。 やがて、それがぬいの手に届くところまで近寄ってきた。

ぬいは作法通り死の儀式を行った。 魂は肉体を離れ、無限の宇宙空間を、懐かしい人々の方向に流れて行った。 （終わり）

（後書き）

「ぬい」に感じるものがあつたら、E-mailをいただくと幸いです。

E-mail: dante856@hotmail.com又は
susato@comcast.net ペン・ネーム（二つ）:

神田 了、そして三崎伸太郎

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1867j/>

ぬい

2010年10月8日15時25分発行